

第22回
外国人による
日本語スピーチコンテスト

2013年2月16日（土）午後 1:00 ～4:30
ところ： 県民文化センター小ホール
主催： 公益財団法人 茨城県国際交流協会
共催： 茨城県

* 茨城県教育長賞

セーラ パールジャ (アメリカ出身)

「ひとくちからの国際理解」

こんにちは。今日は「食べ物がどのように国際理解をもたらすか」ということについて発表したいと思います。よろしくお願いします。

『寿司は好きですか？納豆を食べられますか？』これらの質問は、日本にいる外国人が必ず日本人から尋ねられる最初の質問です。ほかにも聞きたいことはたくさんあると思うのですが、面白いことに日本人はまず食べ物について尋ねてくるのです。

食べ物でもっとも印象に残る出会いは本わさびです。アメリカにもわさびはありますが、それは粉のわさびをねったもので、そんなにからくありません。私は本わさびをアメリカで食べていたようないきおいで食べたので大変なことになりました。鼻がツーンとし、おおつぶの涙が出てきて・・・本当にびっくりさせられました。けれどもやはり、おいしいと思ったのです。

わたしが日本食が好きな理由の一つには、そのあじわいだけではなく、日本人の食に対する考え方にもあります。たとえばそばを打つ人は、「たくみ」ともいえるそば職人です。「たくみ」は日本人の魂そのもののようです。ふつうの日本食でも材料は季節の旬の素材を使い、少量ずつ見た目の彩も美しく、栄養的にもバランスがとれたものをゆっくり楽しめる工夫があります。すべての国の人々が自国の食文化を誇りに思っているように、日本人は日本料理に誇りを持っています。日本の料理は日本人のアイデンティティーだとわたしは思うのです。同時に、世界に対してもそれは日本人の心を示しているように感じます。

たとえば、アメリカのハンバーガーを食べる時は、牛が放牧されている広い草原をイメージするでしょう。広大な草原を想像することで、「アメリカ人が大きいものが好きだ」ということがわかるかもしれません。お寿司を食べる時は、魚の種類が多さから「日本は海に囲まれた島国なんだなあ」と想像できます。また、お寿司がいろとりどりに並べられ、芸術的に盛りつけられることから、日本人は「食」のなかの「美」を大切にしていることも想像できます。このように食べ物は単に食するだけでなく、深くぎんみすることにより、国際理解につながるし、また世界の人々を結びつけることにもつながると思うのです。

アメリカ元国務長官、ヒラリー・クリントンも「食と国際理解」について理解があり、アメリカ国務省では『外交のための食卓』と呼ばれる新しいプログラムを始め、外国からの訪問者に対しアメリカ料理にその訪問者の自国の食材を加えた料理を提供しています。二国間の食べ物がマッチすれば、外交も一緒に協力して行うことができるという考え方からなのです。彼女は“お互いの国の好きな料理を共有することは、無意識のうちに外交のための強力な手段となりうる。”と言っています。

日本にいる外国人教師として、わたしは国際理解を促進する役割を担っています。私の生徒たちに「世界で行きたいところはどこですか」を尋ねると、たとえば生徒たちは『パ

スタを食べたいので、イタリアに行きたいです』のように答えます。人々が地球の反対側に旅行する最初に出てくる理由が食べ物であることはすごいことだと思いませんか。世界中どこでも、人々が食事を共にするし、それは特別な時間です。そして食文化というものは神聖で特別なものです。言語や文化を共有しない人々でも、食は共有することができ、人々をまとめる力を持っているのです。

食という身近なものが「国際理解をひろげていく」。

「食」って、本当に魔法のような力を持っていると思いませんか？